

第十六章 省略・共通構文[関係]・挿入 代用表現・同格

省略

レクチャー1

英語に置ける「省略」。

英文において、(本来あるべき文中の)ある一部が省略されてしまうことがあります。

どのような場合に省略というものが起きるのか?、そしてそこに省略されている語(句・節)は何なのか? それがわからないと、いつまでたっても英文を正確に読みこなすことはできません。省略は文法問題だけでなく解釈においても重要なマスターしておくべき單元なのです。

そんな省略には2種類があり、以下になります。

1.慣用的な省略

2.同じ形の反復[繰り返し]を避けるための省略

では、それぞれを詳しく見ていくことにしましょう。

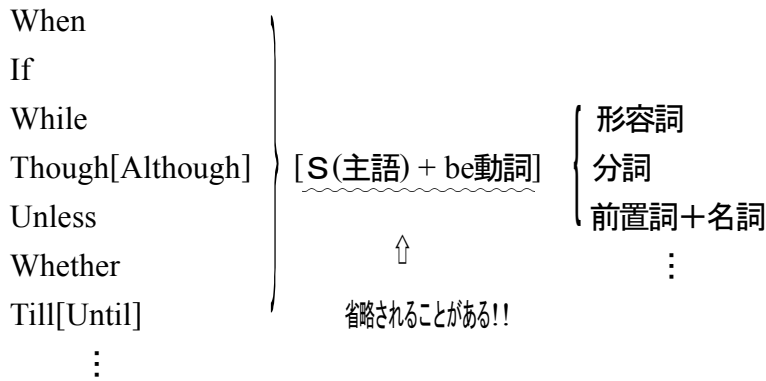
レクチャー2

慣用的な省略 その一。

副詞節内での「S(主語) + be動詞」の省略

以下のような副詞節を導く従位接続詞の後ろの「S(主語) + be動詞」は省略されてしまうことがあります。

☞ 従位接続詞とは簡単に言うと and, but, or, for 以外の接続詞のこと。



このような省略が起きるのは、以下の2つの条件が揃った場合です。

① そのS(主語)が、主節の主語と同一である

☞ 主節とは、(従位)接続詞・関係詞・疑問詞等のついていない(裸の)「S+V」のこと。

② そのbe動詞の時制が、主節の動詞の時制と同じである

以下の例文を見てください。

(ex) While I was walking on the street, I met an old friend of mine.

通りを歩いていたら、古い友人の一人に会った

while (が導く)節、主節共に主語は I、動詞の時制も共に過去時制です。上記の2つの条件が揃っているので、この英文は以下のように I was を省略できます。

→ While walking on the street, I met an old friend of mine.

^

逆に解釈問題などでは、従位接続詞に直接「形容詞」「副詞」「前置詞+名詞」「分詞」などがくっついた構造を見かけたら、従位接続詞の後ろに

『S(主語)+be動詞』

が省略されているのではないかと、これからは頭を働かせるようにしましょう。

ただ、例外的に上記のルールが当てはまらない副詞節内の「S + be動詞」の省略もあります。それが以下の場合です。

① 過去と現在を対比させたような英文

(ex) I am happy now though (I was) unhappy in childhood.

子供時代は不幸せだったが、今は幸せだ

② 「when necessary(必要な場合には)」のような慣用的な表現

(ex) when(ever) possible 「可能な場合にはいつでも」
whenever necessary 「必要な場合にはいつでも」
if possible 「もし可能ならば」
if necessary 「もし必要ならば」

この場合 it is が when(ever), if の後ろに省略されている。

③副詞節内の主語が「一般の人」を表す you[we, one] の場合

(ex) While (you are) driving, it is important to drive safely.
運転する際には、安全運転することが大切だ

④ however[=no matter how]の後ろの「S+be動詞」も省略されることがある

(ex) However skillful (he is[may be]), every driver must a test.
たとえどんなに腕がよくても、運転する人は試験に通らねばならない
However small (it is[man be]), every effort will pay off someday.
どんなにささやかであれ、努力はいつか報われるものだ

レクチャー3

慣用的な省略 その二。

疑問詞関連の省略

(1) How come S+V~?

これは、元々以下のような英文でした。

How did[does] it come about that S+V~?

それが(特に口語などで)省略が起きて how come S+V~? で「どうして」「なぜ」という驚きを表します。come の後ろが「S+V」の語順になるのがポイントです。

Why+疑問文の語順? や What+疑問文の語順+for? で言い換えることができます。

(ex) How come you were absent from school yesterday?

なぜ昨日学校を休んだの

=Why were you absent from school yesterday?

=What were you absent from school yesterday for?

「What+疑問文の語順+for?」で「なぜ～?」「何のために～?」も頻出表現です。下は「何のために～?」という場合の例文です。

(ex) What is this used for?

これは何のために使われるのですか

それから、会話などでは ”How come?(どうして)” と、単独で使われることもあります。これは why や what ~ for にしても同じです。

(ex) A: I won't be able to attend the party. パーティには出れないよ

B: How come?

どうして

=Why?

=What for?

(2) What if S + V ~?

1. What would [will] happen if S + V ~? の省略形として。

(a) [提案] 「～したらどうか」

(ex) What if you move the desk a little?

机を少し動かしたらどうだろうか

(b) [問いかけ・不安] 「(主に好ましくないことが)～したらどうなる[する]だろうか」

(ex) What if it rains?

雨が降ったらどうするの

2. What does it matter if S + V ~? の省略形として。

「～してもかまうものか」「～だとしたらどうだというのだ」

(ex) What if I fail the exam?

試験に落ちたってかまうものか

(3) Why not?

1.[禁止・拒絶・否定などの文への応答として] 「どうしていけないのか」

(ex) A: You shouldn't smoke. たばこを吸ってはいけない

B: Why not? どうして(だめなの)

2.[許可・勧誘を意味する質問に対して同意を表して] 「もちろんさ、いいとも」

(ex) A: Let's go. さあ行こう

B: Why not? もちろん

(4) So what? 「だからなんだ[どうした]というのだ?」

(ex) A: You drink too much. 飲みすぎだよ

B: So what? だから何だってんだよ

(5) Guess what! 「ねえねえ」 ☎会話で、びっくりするような話を切り出すとき
「あのね」 などの表現として用いる。
what の後に happened が省かれていると考
えてみるといい。

レクチャー4

慣用的な省略 その三。

本来繰り返しを避けるための省略だが、慣用的に用いられるもの

以下にあげる表現は、本来は繰り返しを避けるための省略だったものが、今では一種の慣用語、つまりイディオム的に用いられるようになったものです。ですから、これらは決まり文句として覚えてもいいでしょう。

(1) seldom[rarely] の後の if ever は「たとえあるにしても」と訳す。

(ex) She seldom, if ever, goes to the movies.

彼女は(たとえ行くことがあるとしても)滅多に映画に行かない

seldom[rarely] の後ろで if ever がカンマにはさまれて挿入的に用いられることがあります(あえて和訳に出す必要はない)。if の後に省かれた「S+V」は主節の「S+V」と同一です。

更に、この if は even if の意味、つまり「たとえ～だとしても」です。したがって、上記の例文の if ever は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if ever = even if she ever goes to the movies

たとえ彼女が少しでも映画に行くことがあるとしても

(2) if at all は「たとえ～だとしても」と訳す。

(ex) I can recall the scene but vaguely if at all.

その光景がたとえ思い出せるにしてもごくぼんやりとだ

上記の例文の if at all は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if at all = even if I can recall the scene it at all

たとえ少しでもその光景を思い出せるとしても

④ at all は条件文では「少しでも」という意味になる。

(3) A, if not B は「BではないにしてもA」と訳す。

(ex) What he said was accurate in many, if not most, respects[点].

彼の言ったことは、ほとんどではないにしても多くの点で正確だった

上記の例文の if not は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if not = even if what he said was not accurate in most respects

また、A, if not B は if not B, A で言い換えることもできます。

④ AとBは構造的に等しくなる(内容的にも「A≐B」)。

ただし「BでなければA」という意味になることもあるので注意。

(4) if not は「もしそうでないなら」と訳す。

(ex) You'd better leave now, if not you'll miss the last train.

今すぐ出かけた方がいい。もししないと終電に乗り遅れるぞ

上記の例文の if not は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if not = if you do not leave now

(5) if so は「もしそうなら、もしそれが事実なら」と訳す。

(ex) He might set out on a trip next week. If so, we won't be able to see him.

彼は来週旅行に出かけるかもしれない。もしそうなら彼には会えないな

(6) if any には、there is[are] が省略されている。

① little[few] if any は「たとえあるにしてもほとんど~ない」と訳す

(ex) There is little, if any, difference between the two.

両者の間にはたとえあったとしてもごくわずかしか違いはありません

上記の例文の if any は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if any = even if there is any difference between the two

② if any で「もしあれば」と訳す

(ex) Correct errors, if any.

もしあれば誤りを訂正せよ

上記の例文の if any は、その省略を補えば以下のように書き換えられます。

if any = if there are any errors

(7) if anything は「どちらかと言えば[言うと]」と訳す。

(ex) If anything, she works too hard.

どちらかと言うと彼女は働きすぎだ

上例のように「どちらかといえば」と訳すことが多い(特に文頭の場合)のですが、それ以外に「たとえあっても[あるとしても]」と訳す if anything もありません(これもあまり和訳に出す必要はない)。

(ex) In those days I had little, if anything, money.

その当時私は(たとえあるとしても)ほとんど金を持っていなかった

レクチャー5

慣用的な省略 その四。

仮定法における「if」の省略

仮定法の if は省略することもできます。ただ、if が省略されると、条件節は「疑問文と同じ語順」になります。以下にその例をあげてみました。

(ex) Were I a bird, I would fly to you.

=If I were a bird, I would fly to you.

もし僕が鳥なら、君の所に飛んでいくのに

Had I had more money, I would have bought it then.

=If I had had more money, I would have bought it then.

もしもっとお金を持っていたなら、その時それを買っていたのだが

Were he to come here, what would he say?

=If he were to come here, what would he say?

もし仮に彼がここに来たら、何というでしょう

Should it rain tomorrow, the picnic will be put off.

=If it should rain tomorrow, the picnic will be put off.

もし万一明日雨が降れば、ピクニックは中止になるだろう

慣用的な省略 その五。

「要求」「提案」「命令」「決定」を表す動詞、形容詞の後の that 節内では「should+V[原形]～」が用いられるが、この should は省略されることがある。

(1) S + Vt + that S + (should) + do[原形]～.



※下線を引いた語は頻出。

- ①要求(demand「要求する」, require「要求する」, ask「要求する」, request「要求する」
insist「要求する、言い張る」, urge「要求する、言い張る」等)
Ⓢ urge には「～するよう(熱心に)勧める」という、「提案」の意味もあり。
- ②提案(suggest「提案する」, propose「提案する」, advise「忠告する」, recommend「推薦する」等)
- ③命令(command「命令する」, order「命令する」等)
- ④決定(decide「決定する、結論を下す」等)

(ex) He insisted that I (should) pay the bill.

彼は私がお金を払うよう言い張った

(2) 形容詞 + that S + [should] + do[原形]～.



※下線を引いた語は頻出。

necessary「必要な」, urgent「緊急に必要な」, important「重要な」, essential「不可欠な」
desirable「望ましい」, crucial「極めて重要な」, vital「極めて重要な」, advisable「望ましい」
imperative「絶対必要な」

繰り返しになりますが、要するにこのタイプの形容詞は、「何かかなされなければならない」とか「重要である」といった(相手に対する要求・勧告・願望を含蓄する)意味のものです。

(ex) It is necessary that you (should) pack and leave at once.

君はすぐに荷作りして出かける必要がある[→ 出かけた方がいい]

慣用的な省略 その六。

その他

これ以降は、少々細かなルールが多いのですが、ただ読解などで必要になることもあるので一応紹介しておきます。

(1)分詞構文における「being」「having been」は省略されることが多い。

(ex) (Being) Tired with the labor, I went to bed at once.

仕事に疲れたので私はすぐに床に就いた

(Having been) Taught German since her childhood, she is very good at German conversation.

子供の頃からドイツ語を教わっているので、彼女はドイツ語会話がとてもうまい

(2)「前置詞(句)」の省略。

①動名詞の前の前置詞は省略されることがある

(ex) The chemist spent his time (in) studying his field.

その化学者は自分の分野の研究に時間を費やした

I had some trouble (in) solving this problem.

私はこの問題を解くのに苦労した

He was late (in) coming home.

彼は家に帰ってくるのが遅かった

② size, age, color などの前の「of」は省略されることがある

(ex) A boy (of) your age should know better.

君の年齢の男の子なら、もっと分別があつていいはずだ

Look at those buildings (of) the same color.

同じ色のその建物を見てご覧なさい

These bottles are (of) the same size.

これらのボトルは同じ大きさです

☞この of は「～の性質[特徴]を持った」という意味の of。

- ③疑問詞で始まる名詞句(節)の前の「～に関して」という意味の「as to」「of」は省略されることがある

(ex) She was at a loss (as to) what answer to make.

彼女はなんと返事したらいいのかわからなくて途方に暮れた

He had no idea (as to) what measures to take.

彼はどう対処したらいいのかわからなかった

I am ignorant (of) when I should do that.

いつそれをすべきなのかわからない

(3) 「冠詞」の省略。

- ①(学校・教会・寝床などの)「建物・場所」が、その本来の目的で用いられる場合には、冠詞は省略される[つけない]

(ex) You have to go to [xthe] college for four years.

大学には四年間(勉強するために)行かねばならない

I go to [xthe] church regularly.

定期的に(礼拝のために)教会に行っている

☞本来の目的以外でその場所に行くという場合には、冠詞が必要。

(ex) They went to the church to meet their friends.

彼らは友人に会うためにその教会に行った

- ②交通[通信]手段を表す前置詞の by の後では、冠詞は省略される[つけない]

(ex) by [xan] air 飛行機で

by [xa] bicycle 自転車で

by [xa] ship 船で

by [xa] bus[car] バス[自動車]で

by [xan] e(-)mail Eメールで

by [xa] fax ファックスで

☞ by the[a] train などとは言わないので注意。

③「職務」や「地位」を表す名詞がC(補語)になる場合、冠詞は省略される

(ex) They elected George (the) captain of the club.

彼らはジョージをクラブのキャプテンに選んだ

Mr. Gibson is (the) principal of our school.

ギブソン先生はうちの学校の校長だ

會 唯一の、あるいは特殊の目立った職務や地位を表す名詞にはふつう冠詞をつけない。ただし the をつけることもある。

會 「～として」という前置詞の as の後に、唯一の役職などを表す語がくる場合も、ふつう無冠詞。ただし冠詞をつけることもある。

(ex) Who will act as (the) manager?

誰が支配人の代理をするのですか

As (the) Prime Minister, he has to make the final decision.

首相として彼は最終決定を下さなければならない

④「名詞 + as + S + V: SはVだけれど」の構文では文頭の冠詞は省略される
[つけない]

(ex) [×A] Child as he was, he knew what to do first.

彼は子供だったけれども、まず何をすべきか知っていた

會 A child as he was, とは言わないので注意。

(4)「接続詞」などの省略。

① think, suppose, believe, know などの目的語になる節を導く接続詞の that は、(口語などでは)よく省略される省略されると「S+V S+V～」という構造になる

(ex) I thought (that) you came to see me yesterday.

僕は君が昨日僕に会いにくると思った

② No wonder S+V～ 「～なのも不思議ではない[もっともだ]」

この構文は元々 It is no wonder that S+V～ という仮主語構文だったもの。

それが(口語表現で) It is と that が省略されてこのようになったのです。

(ex) (It is) No wonder (that) such a wise man should succeed.

そんな賢い男が成功するのは不思議ではない[もっともだ]

③ 「Now that S + V～(今はもう～なので)」の that は省略されることがある

(ex) Now (that) you are old enough, you should know better.

(今は)もう大人なんだから、君はもっと分別があってしかるべきだ

④ 「so～that S + V…(とても～なので…)」の that は省略されることがある

(ex) The English teacher had so many students (that) he could not remember their faces.

その英語の先生はとてもたくさんの生徒を持っていたので、彼らの顔を思い出すことができなかった

⑤ 「so that S may[can/will] V～(Sが～するために)」の that は省略されることがある

壹文語では so の方が省略されることもある。

(ex) He stepped aside so (that) the child could pass.

彼はその子供が通れるようにどいてあげた

He worked hard (so) that his family could live in safety.

彼は家族が安心して暮らせるよう一生懸命働いた

(5)最上級や if 節の前の「even」の省略。

最上級や if 節がそのままでは日本語としておかしい場合には、以下のように even を補ってみるといいでしょう。

(ex) (Even) The wisest man does not know everything.

どんな賢い人でも、全てのことを知っているわけではない

(Even) If the sun were to rise in the west, my love would never change.

たとえ太陽が西から昇ったとしても、僕の愛は変わらない

(6) 「関係代名詞(目的格・主格・補語格)」「関係副詞」の省略。

① 関係代名詞の目的格は省略できる

(ex) He utilized the knowledge (which) we acquired in book.

彼は本から得た知識を活用した

② There is や Here is で始まる文では、主格(の関係代名詞)も省略できる

(ex) There is no one in my class (who) can speak English so well as he.

うちのクラスで彼ほど英語を上手に話せる人はいない

③ 関係代名詞節内が there is や here is で始まる文では、主格も省略できる

(ex) This is the oldest tree (that) there is in this park.

これはこの公園にある最も古い木です

④ 「It is S who[that] V～」という形の強調構文では who[that] は省略できる

(ex) It is the man (who[that]) stole my purse.

私の財布を盗んだのはその男だ

⑤ 補語格も省略できる

(ex) She is no longer the young little girl (that) she once was.

彼女はもはや昔の幼い少女ではありません

⑥ 連鎖関係詞節をつくる関係代名詞は(主格でも)省略できる

(ex) I employed the person (who) I thought was diligent.

私は、勤勉だと思っ人をつら

⑦ 関係副詞に関して

1. 先行詞が the place, the time, the reason の場合、関係副詞自身又はその先行詞を省略することができる。

(ex) This is the place where I live now.

ここが私が今住んでいる場所です

=This is the place I live now.

=This is where I live now.

2.関係副詞の how は、先行詞(the way)、もしくは how 自身を必ず省略しなければならない。したがって「the way how S+V～」という形はない。

(ex) This is how they solved the problem.

そういうふうにして彼らはその問題を解決した

=This is the way they solved the problem.

×This is the way how they solved the problem.

(7)「(主格の)関係代名詞+be動詞」の省略は省略できる。

(ex) Those (who were) present were impressed with the story.

出席していた人々はその話に感動した

(8)所有格の後に「場所」「建物」を表す名詞が来る場合、その名詞は省略できる。

(ex) I went to the barber's (shop) yesterday.

昨日床屋に行った

(9)不定詞の to の省略。

①「help+O+to do[原形]～(Oが～するのを手伝う)」の to は省略されることがある

(ex) He helped me (to) do my homework.

彼は私が宿題をするのを手伝ってくれた

②「All S can[have to] do is (to) do[原形]～(Sにできるのは～することだけだ[Sは～しさえすればいい])」の to は省略されることがある

(ex) All we can do is (to) wait for him.

我々にできるのは彼を待つことだけだ

All you have to do is (to) finish your job.

君は自分の仕事を終えさえすればいい

to が省略できるのは、is[was] の前に do がある場合のみ。それ以外の一般動詞の場合は、to は省略しません。

(ex) All I can give you is to say "Good luck".

「幸運を祈ります」としか言えません

上例も is の前にあるのが do ではないので、to say の to は省略しません。

(10) To think (that) S + V ~! 「~だなんて(本当に残念だ、バカだ)」。

この表現は、「What a pity it is」、又は「What a foolish thing it is」が to think の前に省略されていると考えられます。

(ex) To think (that) such a promising person like him should have died so young!

彼のような前途有望な人間がそんなにも若くして死んだなんて(本当に残念なことだ)

(11) 「the+比較級 S+V~, the+比較級 S+V…」の構文における省略。

① 「the+比較級 S+V~, the+比較級 S+V…」の構文で、「V」が be動詞や become の場合、その be動詞(become) は省略されることが多い

(ex) The larger the audience (is), the better the profit (is).

聴衆がたくさんであればあるほど、利益は上がる

② 慣用的な言い回しでは、the+比較級の後ろの「S+V」が省略されるものもある

(ex) The sooner (you do it), the better (it will be).

早ければ早いほどいい

(12) 否定の原級比較や比較級の表現で、「as~」「than~」が全て省略されている場合の補い方。

- ① 動詞が現在完了ならば ☞ 「今ほど」を補ってみる
動詞が過去完了ならば ☞ 「そのときほど」を補ってみる

②その時制以外ならば ☞ 「これほど」を補ってみる

②の場合、「これ」が何を指すかは文脈から判断します。

(ex) I have never been so happy.

上例は現在完了なので、「今ほど」を補って訳してみます。そうすると訳は「今ほど幸せだったことはない」となります。

(ex) (It) Couldn't be better.

上例は完了形ではないので、「これほど」を補って訳してみます。そうすると訳は「これほど良いものはない→(これは)最高だ」となります。

ちなみに Couldn't have been better. は「これほど良いものはなかった→(これは)最高だった」となります。

レクチャー8

繰り返しを避けるための省略 その一。

等位接続詞や比較の as, than の後ろ[右側]における省略

繰り返しを避けるための省略が最も起きやすいのは、等位接続詞(and, but, or など)や比較の as や than の後ろです。その理由は、等位接続詞(and, but, or など)や比較の as や than の後ろ[右側]では、前(つまりその左側)で書かれた内容[語句]が反復されることが多いからです。

☞ 結果として、この部分では、繰り返しを避けるための省略が多く見られることになる。

したがって等位接続詞や比較の as や than の後ろ[つまり右側]の意味がうまくつかめないという場合、まずこのタイプの省略があるのでは、と考えるといいでしょう。

具体例を1つあげてみましょう。

Some boys like baseball and others football.

上の波線部に注目してください。

- ① and の右側にある
- ② 英文として構造的に不完全でこの部分だけ取り出してみた場合、意味が不明

以上の点から、波線部には繰り返しを避けるための省略がなされていると判断できます。

このような場合、同構造になっている(等位接続詞の)その直前の文[箇所]を参考に、繰り返しによる省略によって生じた「不完全な形」を元の「完全な形」に戻してみればいいのです。

④つまりその意味不明箇所と(その左側の)同構造の箇所を比較し、左側にあって右側にはないものを探す。

そこで上例を、and の左側を参考に省略された語句を探してみます。すると、

Some boys like baseball
S V O

and

others (like) football.
S V O

こうして両者を並列させてみれば、others の後ろにV、つまり like が省略されていることがわかるわけです(like を補って全体を訳せばいい)。訳は「野球が好きな少年もいればサッカーが好きな少年もいる」となります。

この種の例を他にいくつかあげてみましょう。

(ex) She studied ceramic art in Japan and (she studied) painting in Paris.

彼女は日本で陶芸を、パリで絵を学んだ

He was searching for something but I don't know what (he was searching for).

彼は何かを探していたが、何を探していたのかは私にはわからない

Mr. Yamane teaches us history and Mrs. Sato (teaches us) English.

山根先生は私たちに歴史を、佐藤先生は英語を教えてくれている

Jack is a man of learning, but (Jack is) not of practice.

ジャックは学問はあるが実践力はない

Sumiko sings better than she used to (sing).

すみ子さんは、以前より上手に歌います

繰り返しを避けるための省略 その二。

代不定詞

繰り返しを避けるための省略は、等位接続詞や as、than の右側以外でも、(同語の反復があれば)起こり得ます。

たとえば、to不定詞の後にくるべき動詞の原形部分が、直前の文[節]の動詞(+目的語など)と繰り返しになる場合、to不定詞の to だけを用い、それ以降は省略することがあります。このような(動詞の原形部分が省略された)不定詞を代不定詞と言います。

(ex) If you don't want to come here, you don't have to.

もしここにきたくなければこなくていい

上の英文では、文末の to の後ろに come here が本来くるべきなのですが、繰り返しになるために省かれています。

(ex) A: Could you do me a favor? お願いがあるんですが

B: I'd be very happy to. 何なりと

上の英文では、文末の to の後ろに do you a favor が本来くるべきなのですが、繰り返しになるために省かれています。

代用表現

レクチャー

that 節の代用。

これがよく問題として問われるのは「I hope so[not]」「I'm afraid so[not]」の2つです。hope は、「(望ましい事を)思う」という意味。be afraid は、「(望ましくない事を)思う」という意味なので、当然ですが、hope の後ろには「(話者にとって)望ましい内容」が、be afraid の後ろには「(話者にとって)望ましくない内容」がきます。

そしてこの I hope や I'm afraid の後ろの that 節が、so や not で代用されることがあるのです。その使い分けは以下の通りです。

- ①本来 hope / be afraid の後ろに来るべき that 節が肯定文であれば、(その肯定の that 節は) so で言い換えることができる

A: Will he get well soon?

B: I hope that he will get well soon.

上の例文の波線部は、肯定の that 節ですから so で言い換えることができ、B のセリフ全体は I hope so. と表現することができます。

では逆に、下の英文の so は、元々どのような文だったのでしょうか？

A: Will she cry again?

B: I am afraid so.

so ということは、肯定の that 節の代用ということになるので、直前の英文に that を補って肯定の that 節にしてみればいいのです。すると

so = that she will cry again

とわかります。

- ②本来 hope / be afraid の後ろに来るべき that 節が否定文であれば、(その否定の that 節は) not で言い換えることができる

A: We are planning to go on a picnic. Will it rain tomorrow?

B: I hope that it will not rain tomorrow.

上の例文の波線部は、否定の that節ですから not で言い換えることができ、
Bのセリフ全体は I hope not. と表現することができます。

では逆に、下の英文の not は、元々どのような文だったのでしょうか？

A: Will he get well soon?

B: I am afraid not.

not ということは、否定の that節の代用ということになるので、直前の英文
に that を補って否定の that節にしてみればいいのです。すると

not = that he will not get well soon

とわかります。

もちろん so[not] は、hope / be afraid 以外にも、think, suppose[思う], expect[予想する],
guess[推測する], believe などの後ろにも置くことができます。使い方は、上記と基本
的に同じです。ただし、

I think[suppose, expect, believe, guess] not.

は I don't think[suppose, expect, believe, guess] so. で書き換えられるのに対して
hope / be afraid は「I don't hope so.」「I'm not afraid so.」とは言えません。こ
の点は要注意です。

共通構文〔関係〕

レクチャー 1

共通構文〔関係〕とは。

次の英文を見て下さい。

(ex) It may or may not be true.

それは本当かもしれないし、そうでないかもしれない

この英文は、本来なら It may be true or (it) may not be true. となるべきものがそれでは英文が長く、またくどくなるので、繰り返し部分を省いた結果、上のようになったと考えられます。

$$\text{It } \left\{ \begin{array}{l} \text{may} \\ \text{or} \\ \text{may not} \end{array} \right\} \text{ be true.}$$

と分析することができます。

このように1つの語(句)が2つ(以上)の語(句)のどれにも同じようにかかって、共通要素を省略した結果、本来「 $ax+bx$ 」となるべき構造が、「 $(a+b)x$ 」という形になってしまう場合があります。この時、 a と b は x に対して共通(の)関係にあるといい、この形式を共通構文と言います。上の英文の場合、be trueが共通語句(x)で、mayとmay notがそれぞれ a , b にあたります。この共通構文〔関係〕には、大きく分けて2つの型があります。それを以下のレクチャーで、順に紹介していきましょう。

レクチャー 2

「 $(a+b)x$ 」型の共通関係。

これは、要するに共通語(句)が後に置かれているものです。

(ex) I want to know the time and the place of the next meeting.

上の英文では、a, bにあたるのが the time と the place で、共通語句(x) が of~meeting になります。

I want to know
V

{ the time and the place }	of the next meeting
--	---------------------

○

意味は「次の会合の時間と場所を知りたい」となります。

(ex) Jack and Kim have led a kind of cat and dog life for years.

ジャックとキムは長年の間犬猿の仲だった

上の英文では、a, bに当たるのが主語の Jack と Kim で、共通語句(x)が動詞の have led になります。

(ex) I saw Lake Biwa on my way to and from Kyoto.

京都への行き帰りに琵琶湖を見ました

上の英文では、a, bにあたるのが to と from で、共通語句(x) が Kyoto です。

レクチャー 3

「x(a+b)」型の共通関係。

これは、要するに共通語句が前に置かれるものです。

(ex) She was seen to enter the department and to buy a jewel.

上の英文では共通語句(x) が seen で、a, bにあたるのが to~department と to~jewel です。

She was seen {
to enter the department
and
to buy a jewel.

意味は「彼女はデパートに入り、宝石を買うのを見られた」となります。

(ex) George was, and is, a rising star in his family.

ジョージは一家にとっての希望の星だったし、今もそうだ

上の英文では、共通語句(x)が主語の George で、a, bにあたるのが was と is です。

(ex) Water turns into ice at 0° C and into steam at 100° C.

水は摂氏0度で氷になり、摂氏100度で水蒸気になる

上の英文では、共通語句(x)が turns で、a, bにあたるのが into~0° C と into ~100° C になります。

挿入

レクチャー 1

挿入について。

英文中の様々な箇所、カンマ(,)やダッシュ(-)などによってはさまれて語(句・節)が挿入されることがあります。英文の解釈においては、そのような挿入語(句・節)はいったん()でくくってしまうと、文の骨組みがグッと浮かび上がってきますね。以下に、英文中に挿入される様々な語(句・節)の種類を、ではまとめてみましょう。

レクチャー 2

英文中にカンマやダッシュを用いて挿入される様々な語(句・節)の種類。

(1)名詞(句・節)。

挿入部分が名詞(句・節)の場合、たいていは(同格として)前の名詞を説明して[言い換えて]います。

(ex) Two passengers, an American and a Japanese, were killed in the accident.

アメリカ人と日本人の2人の乗客がその事故で亡くなった

上の英文でも、下線部は主語の Two passengers の言い換えですね。

(2)関係詞節。

挿入部分が関係詞節の場合は、それは前の名詞を説明しています。

(ex) My dog, whose color is white and black, loves me much.

うちの犬は白黒のブチだが私のことがとても好きだ

上の英文でも、下線部は主語の My dog を説明していますね。

(ex) He is promising, to be sure, but he has little experience in life.

なるほど彼は将来有望だが、人生経験が浅い

(4)主節。

~, ㊦+㊧, ~

~, ㊦+㊧.

という形で、主節が文中盤や末尾に挿入されることがあります。その場合は、その部分を文頭に移動させ、元の構造に戻してみるといいでしょう。

(ex) John, it seemed, was ill.

→ It seemed (that) John was ill.

ジョンは病気のように見えた

主節が挿入される場合、㊧(動詞)部分は「言う」「思う」「見える(seem)」「聞く(hear)」といった動詞がくることが多いですね。

I think[suppose, believe] it is certain I'm sure

you know「お分りのように」 there is no doubt

he[she, they] said it seems[appears]

また、

~, ㊧+㊦, ~

~, ㊧+㊦.

と、㊦と㊧がひっくり返って文中や文の末尾に主節が挿入されることがあります。

(ex) "I believe", said John, "we should participate in the meeting".

我々はその会合に出席すべきだ、とジョンは言った

→ John said, "I believe we should participate in the meeting".

このような場合、㊧は「言う」と訳せる動詞がくることが大半です。

同格

レクチャー1

同格とは。

同格とは、名詞(又は名詞相当語句)を、他の名詞(又は名詞相当語句)と並べて、つまり

名詞, 名詞

という形で、後ろの名詞が前の名詞を補足的に説明したり、言い換えたりするという用法です。同格とは後続の名詞の格が先行する名詞の格と同じという意味。つまり内容的には両者は「イコール関係」ということです。

レクチャー2

さまざまな同格のパターン その一。

「名詞+名詞」の同格表現

同格の最も代表的なパターンは

名詞, 名詞

と、名詞と名詞の間がカンマ(,)で区切られるものですが、カンマの代わりにコロン(:)、セミコロン(;)、ダッシュ(—)が使われることもあります。その場合、後ろには文(「S+V」の形)がくることもあります。

そして(カンマの場合も含め)このタイプの同格は「つまり」「即ち」という訳を同格となる表現の訳の前につけるといいことが多いのです。

例をいくつかあげてみましょう。以下の英文中の下線部は、直前の語と同格になっています。

(ex) Nancy, the girl who sits next to me in class, is very cute.

ナンシー、つまり授業で私の隣に座っている女の子はとてかわい

This cake has three layers[層]: red, yellow and brown.

このケーキは三層になっている。つまり、赤、黄、茶の三色だ

This is a free country; we can do and say anything unless we break the law.

ここは自由の国だ。即ち法律を破らない限り何をすることも言うこともできる

コロン、セミコロン、ダッシュ以外にも、それらと同じ意味の that is (to say), namely, or (これらも「すなわち」「つまり」と訳す)などが、同表現の直前に置かれることもあります。

(ex) She was the youngest daughter, namely Mary.

彼女が一番年下の娘、すなわちメアリーだった

Jack is a New Yorker; that is, he lives in New York.

ジャックはニュー Yorker だ。つまりニューヨークに住んでいる

This is a mug, or cup, to drink from.

これは飲み物を飲むためのマグ、つまりカップだ

☞「つまり、即ち」という意味の or は見落としやすい。要注意。

☞ 上記以外の同格表現を導く語句・記号に以下のようなものがある。

- as follows (次のような)
- chiefly, mainly, mostly (主として)
- for example, for instance, something along the following lines,
- to cite a case, like (たとえば)
- especially, in particular, notably, particularly (特に)
- in other words (言い換えれば)
- or rather, (more) correctly (正確に言えば、(より)正確には)
- i.e., viz., to wit, e.g. ☞ 特に書き言葉で改まった言い方に用いる。

あるいはそのような記号や語句で区切らずに、直接名詞と名詞が連続するパターンもあります。

(ex) We Japanese live on rice.

我々日本人は米を常食にする

上例では we と Japanese が同格になっていますが、カンマなどの記号は両者

の間がありません。

レクチャー3

さまざまな同格のパターン その二。

「名詞+名詞」以外の同格表現

(1) 「名詞 + 名詞節(that節・whether節[〜かどうか]・疑問詞節など)」の同格。

以下のように、名詞とその後ろの名詞節が(内容的にイコール関係の)同格になることもあります。

名詞 + $\left\{ \begin{array}{l} \text{that S+V} \sim \\ \text{whether S+V} \sim \\ \text{疑問詞節} \end{array} \right.$

このタイプの同格の場合、「という」という訳を名詞節の訳の後につけるといいでしょう。

(ex) He heard the news that his team had won.

彼は彼のチームが勝ったという知らせを聞いた

The question whether he should perform an operation or not troubled him.

手術をすべきかどうかという問題が彼を悩ませた

The suggestion was made that English teaching should be improved.

英語教育を改善すべきだという提案が出された

最後の例文のように、先行する名詞と that節は、離れる場合もあります。関係代名詞の that と、同格の that(これは品詞的には接続詞)の見極め方は、関係代名詞の後ろには「(S・O・C・所有格のうちのどれか一つが欠けた)不完全な文」がくるのに対して、同格の that の後ろには「完全な文」がくるという点です。

名詞節を同格のパターンをとれる名詞は、以下の通り。

I 「思考」「認識」「発言」を表す名詞。⚠要するに「言う」「思う」「知る[分かる]」から派生した名詞。

thought「考え」 impression「印象」 notion「意見・考え」 idea「考え」

belief 「信念」 knowledge 「知識」 feeling 「感情」 hope 「希望」
argument 「主張」

Ⅱ 「事実(証拠・情報)」「機会・可能性」「要求・命令・提案」を表す名詞。

fact 「事実に」 opportunity 「チャンス」 point 「点」 proof 「証拠」
chance 「チャンス」 possibility 「可能性」 evidence 「証拠」

(2) 「A(名詞) + of + B(名詞) : BというA」。

「A(名詞) + of + doing～ : ～するというA」。

これは、of の後ろのB/doing～ が、前のAの内容を説明する(言い換える)タイプの同格です。

「A=B」「A=doing～」の意味関係になるのが特徴。B/doing～の後に「という」という訳をつけるといいでしょう。以下にいくつか例をあげてみましょう。

(ex) the city of Rome

ローマという町 → ローマの町

the news of the team's victory

チーム勝利という知らせ

his habit of smoking a cigar

葉巻を吸うという彼の習慣

上の例のように、「A of doing～」という形に文中で出会ったら、「～するというA」型の同格と見なしていいことが多いですね。

(3) 「名詞 + to do[原形]～」。

これは、後ろの to do[原形]～が、前の名詞の内容を具体的に説明するタイプの同格です。「名詞=to do[原形]～」の意味関係になるのが特徴です。「(する・できる)という」という訳を不定詞句につけるといいでしょう。

このタイプの同格を作る名詞は、それらを「形容詞化」「動詞化」しても後ろに不定詞を(目的語などに)とるのが特徴です。例えば ability は、形容詞形の able になっても be able to do[原形]～、decision は動詞形の decide になっても decide to do[原形]～(～することに決める)と、不定詞を後ろにとります。

「名詞+to do[原形]～」の同格には、代表例として以下のようなものがあります。

ability	} + to do [願形] ~	「～する(できるという)能力」
opportunity		「～する(できるという)機会」
chance		「～する(できるという)機会」
tendency		「～する(という)傾向」
attempt		「～する(という)試み」
decision		「～する(という)決断」
desire		「～したい(という)願望」

(ex) We have to acquire the ability to speak English.

英語を話せる(という)能力を私たちは身につけなければならない

His ambition to become the world swimming champion was understandable.

水泳の世界チャンピオンになろうという彼の野望はもっともなこと
であった

(4) 「文 + 名詞」。

これは前の文(「S+V」)の内容を、後ろの名詞一語が言い換えるタイプの同格で、

S+V~, 名詞

という構造になります。S+V~と名詞の間には、カンマ以外にコロン、セミコロン、ダッシュなどがくることもあります。

(ex) He thought that she helped him finally, his one-sided belief.

彼は最終的には彼女が助けしてくれると思った。しかしそれは彼の勝手な
思い込みだった。

上の英文では、his one-sided beliefが直前文と同格になっています。つまり
his one-sided beliefは直前文の言い換えです。

このような「文+名詞」の同格の場合、「(接) it is」を、同格の名詞の前に
補ってあげるといいでしょう。上の英文の場合、「しかしそれは(but it is)」
を his one-sided beliefの前に補ってあげるといい和訳になりますね。

(5) 「副詞(句・節) + 副詞(句・節)」。

(ex) Now, We are here in America.

(副) (副)

今や、私達はここアメリカにいる

上の英文では、here という副詞を、in America という副詞句が(同格となって)言い換え説明しています。

(6) 「節 + 節」。

(ex) Her life gave him the courage[臆] to hope that he didn't have to obey his parents, that he could create his own future.

上の英文では、前半の that 節を、後半の that 節が(同格節として)言い換え説明しています。

全体の訳は「彼女の人生は、彼は両親に従う必要はないということ、つまり彼は自分の未来を切り開くことができるということを望む勇気を与えてくれた」となります。